

祝

2017年3月 東京農工大学・早稲田大学 共同研究博士号(生命科学)取得

安藤 泉さん(取得時61歳)

【論文テーマ】イヌにおける様々な外因性ストレスの評価指標に関する研究

自分ができそうなことは次々とやりたくなくなって、犬好きから博士に

■アイメイト(盲導犬)との出会い

アイメイト候補犬のマリカちゃんを伴って財団を訪れた安藤泉さん。アイメイトの飼育ボランティアを始めたのは1995年で、現在のマリカちゃんはもう16頭目になる。きっかけは夫の海外赴任によりアメリカで暮らしたとき、街のパン屋で盲導犬の子犬に出会い感動するとともに、「ボランティアが飼育犬と1年限定の充実した濃い日々を送っている」という記事を読んだこと。日本に戻った数年後、仕事と両立できるか不安はあったが、思い切ってアイメイト協会の飼育ボランティアに応募した。

安藤さんは当時、大手食品メーカーで商品開発などを担当していた。2年間仕事と飼育ボランティアを並行した後、ボランティアに専念。仕事で培ったスキルも生かしながら、飼育だけでなくイベントやチャリティグッズを企画するなど、ボランティアながら深く関わっている。その一つアイメイトカレンダーは、ボランティアたちから飼育犬の写真を募集、当初50部から始めて現在は7000部を販売し、育成資金の一部を担っている。

■学び直しをきっかけに東大のゼミに

楽しく充実したアイメイトボランティアをしていて安藤さんが、なぜ博士号を目指したのか。

「元々じつとしていられない性格で、夫について行ったアメリカでも、マーケティングを勉強したり、ボランティアでパーキンソン病財団の日本人向け広報をしたりしていました。アイメイトでも、企画でも何でも、自分ができそうなことは次々とやりたく

なるんです。博士号も最初は全然そんな気はなくて、

文科省の〈学び直しプロジェクト〉があったとき、母校はどうなってるかなくらいの軽い気持ちで、東京農工大学の獣医学部の講座を受けたのです。盲導犬の勉強をしたいと言ったら、農工大にはいないけど東大には研究している先生がいるよと紹介を受け、現在も継続している盲導犬のゼミに聴講生として参加しました。盲導犬を育てて感じることもあり、自分なりの研究をして論文にしたいと言ったら、事例がないからぜひうちでと誘われ、2012年に農工大の大学院に社会人入学しました」

■盲導犬のストレスを可視化

最初は犬のアトピーを研究したが、財団の博士号取得支援事業に応募するも不合格だった。その後、盲導犬のストレスを検証するため、新たなストレス



国立の東京農工大と私立の早稲田大との共同研究学位はめずらしいケース。両方の図書館が使えるのがうれしい。

マーカーの可能性がある血清中のマグネシウムとNGF(神経成長因子)に着目。従来のマーカーであるコルチゾールでは見分けられなかった、与えるストレスの種類や盲導犬の訓練レベルの違いによる反応の、有意な差を計測することに成功したのだ。マグネシウムは主に環境的ストレスに反応し、NGFは精神的ストレスに反応することが見えてきた。

測定結果には訓練士の実感と重なる部分もあった。訓練をやり始めた直後にうつ状態になる犬がかなりいるが、数か月すると急に明るくなるのだという。訓練初期の犬はマグネシウム、NGFともに低い、訓練後期の犬はどちらも高く、ストレスを受けにくい状態であることを示していた。

■あきらめなければ趣味からでも博士に

今後は、犬の状態と飼育主の判断のギャップを埋め、犬ごとに訓練の進捗を調整するなど、アイメイト育成への還元はもちろん、言葉を交わしにくい乳児や心身症患者の、身体の状態を測る方法などにも発展させられるのではと期待している。

「思うような測定結果が出ないときや、論文に査読がつかなくて進まないときなど、『明日電話して、もうやめると言ったら楽になるな』と思ったことが何度かあります。そんなときは親子ほど年の差のある同期生と励まし合いました。学位論文仕上げ時に1か月ほど家事を放棄して迷惑をかけた夫に、『あきらめないとこはすこいよね』と感心されましたが、あきらめなければ、趣味からでも博士になるチャンスがあるのです。皆さんがんばってください!」